



がんを詠む

会員 澤藤 統一郎 (23期)

つみにゆくみちとはかねてききしかと
きのふけふとはおもはさりしを

ご存じ、伊勢物語終章の一首。自分の死を「きのふけふ」と思うことはない。「患ひて心地死ぬべく覚えける」ことのない限りは…。

昨年春、「患ひ」の自覚はなかったが肺がんの宣告を受け、業平の如く「心地死ぬべく」の心境を味わった。

10年ほど前、吉川勇一さん（元・ペ平連事務局長）から「いい人はガンになる」という著書をいただいた。飄々たるご自身のガン体験の語り口が滅法面白い。ガンになったいい人の列伝があって、「ガンにならない人は、ワルイやつ」との結論に至る。まったくの他人事として愉快地読んだ。その私が、唐突に「いい人」の仲間入りとなったのだ。タバコも酒もやらない私が、よりによって肺がんである。

なんの根拠もなく自分ががんになることなどあり得ないと信じ込み、がん検診を無視し続けてきた。のみならず、20年近く健康診断というものを一切受けていなかった。

健康診断を拒否し続ける心の片隅に、「災難に逢ふ時には災難に逢ふがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候」との良寛の言葉があった。がんの宣告を受けることがあれば、それが我が身の「死ぬ時節」と思い切ればよい。潔さこそ美学ではないか。

ところがどうだ。がんであると分かってのこの私のうろたえようは。命が惜しい。少しでも生きながらえたい。生への執着心は、自分の想像をはるかに超えるものだった。美学なんぞは碎けて散った。

さいわい、私の肺がんは、右肺上葉切除・リンパ節郭清の標準治療で今のところはことなきを得ている。病理検査で転移なしと聞かされたときの心からの安堵が忘れられない。以来、多少の心の余裕ができてきた。

業平に倣って、歌のようなものをひねってみた。そのうちのいくつかを連ねてみることにする。

がんの宣告受けたるその日
大地は鳴動せず日月も欠けず

神在りせば神を怨まん
なんぞかくも気まぐれなる かくも酷薄なる

身じろぎもせずうずくまる人影あり
がん病院の未明のロビーに

手術前夜腕時計突然止まりぬ
ただそれだけのことにてはあれども

鏡にてつくづくわが身を眺めいる
傷なきこの背を見おさむるの日

下手人は世に聞こえし手練れなり
逆袈裟一文字に傷は7寸

敢えて毀傷せり身体髪膚
咎むる父母の既に亡ければ

命拾うたと思ひし朝
富士は輝やき筑波嶺はやさし

五臓六腑に染みいるモーツァルト
五臓の一は欠けてあれども

病床で読む「病牀六尺」
われに子規を憐れむ多少の余裕あり

嗟声（させい）とは医療訴訟で覚えし語彙
我が身のこととは思わざりしを